

# 板木データベースの可能性—データベース連携のことなど

## Potentials of Printing Block Database through Linking with Relevant Databases

金子 貴昭

Takaaki Kaneko

立命館大学 衣笠総合研究機構, 京都市北区等持院北町 56-1

Ritsumeikan University, 56-1 Toji-in Kitamachi, Kita-ku, Kyoto

**あらまし:**本研究は、江戸時代の出版研究に関わり、従来顧みられることのなかった板木を研究資源として活用し、出版研究や板本書誌学を捉え直すことを目的としている。そのため、現在までに 11,000 枚におよぶ板木のデジタル撮影とデータベース構築を進めている。本稿では、板木のデジタル撮影手法、データベース構築、その利用について述べた上で、板木データベースと板木に関連するデータベースとの連携およびその可能性について探る。

**Summary:** This research aims to reconsider the study on commercial publishing in the Edo period (1603-1867) and Japanese bibliographical studies by utilizing printing blocks, as these studies have so far centred around research on printed publications. For that purpose, our project has constructed a digital archive of approximately 11,000 blocks. This paper presents a method of digitizing and archiving them in Printing Block Database. The paper also explores potentials of the database through linking with relevant databases.

**キーワード:** 板木, 江戸時代の出版, デジタル化, データベース

**Keywords:** Printing Block, Publishing in Edo Period, Digitization, Database

### 1. はじめに

江戸時代には商業出版が成立し、大量の板本(出版物)が刊行された。出版産業は拡大の一途を辿り、その結果、1 点の板本を繰り返し印刷する必要が生じたことから、活字ではなく、板木を用いた整版印刷が主流となっていった。現代に伝わる板本のほとんどは、江戸時代以降の整版印刷によるもの、つまり板木で摺られたものといっても過言ではない。文学・宗教・学問など、江戸時代のさまざまな文化的事象は、板本を扱わずして述べることはできない。したがって出版研究はもとより、江戸時代の各分野研究においては、多かれ少なかれ板本を研究資源として扱わなければならない状況にある。

そのような状況であるから、板本を研究資料として客観的に扱うための方法論「板本書誌学」は広く深く蓄積され、板本は諸研究の基礎資料として利用されてきた。しかし、板本に比べて板木は、置き去りにされてきた感が否めない。板木は印刷の道具であるから、板木なくして板本は存在し得ない。江戸時代の出版権(板

株)は板木と連動するものであり、板木なくして版權を云々することもできない。つまり板木は、江戸時代の出版の根幹にあったにもかかわらず、ほとんど顧みられることはなかったのである。

筆者は、この板木を研究の主眼に置き、板本中心に行われてきた板本書誌学や出版研究を捉え直そうとしている。それに関わり、本報告では、板木のデジタル撮影、データベース構築やそれらがもたらす可能性について論じる。

### 2. 板木のデジタル撮影

板木をめぐる上述の状況は、板木が持つ特性に由来するものである。第一に、軽量の板本に比べて、板木は重たく嵩高い。表面には墨や埃が堆積しており、手や服が汚れてしまう。付いた汚れは、簡単には落ちない。第二に、色板を除き、板木はほぼ黒一色であるため、複製資料の作成が困難であり、資料流通の障害となる。第三に、板木には文字や絵が左右反転の状態では彫られており、板本との比較照合が難しい。

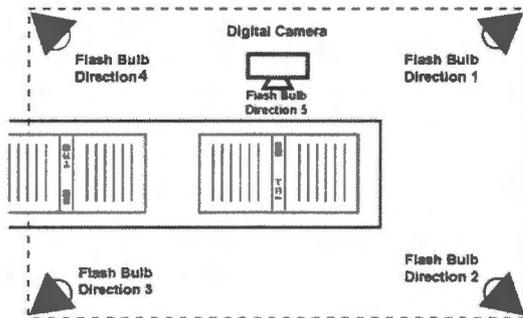


図1 板木デジタル撮影手法

筆者は、これらを克服するために、板木のデジタル撮影という手法をとった。またそれに際して、奈良大学博物館・奈良大学図書館が所蔵する板木約 5,800 枚をデジタル化・調査の対象とした(着手当初は約 5,000 枚)。このコレクションは、板木研究の第一人者・永井一彰氏(奈良大学文学部教授)が集積されたもので、江戸期の板元(出版元)が創業以来、運用・保管してきた一級資料である(注 1)。当該デジタル化プロジェクトは、立命館大学アート・リサーチセンター(以下、立命館 ARC)と奈良大学との共同研究としてスタートした。

撮影方法は、デジタル一眼レフカメラを用いた一般的な俯瞰撮影のセットであるが、ライティングには工夫を要した。フルカラー撮影とはいえ、被写体の板木は黒色である。板木の彫刻面を的確に記録でき、一様ではない板木の凹凸を捉えるライティングが必要であった。そのため、カメラ側からフラッシュ投光して得た標準画像に加え、複雑な彫刻面を記録するための斜光画像を別途撮影した。試行錯誤を重ねた結果、最終的には標準画像と 4 方向からの斜光撮影、合わせて、5 パターンのライティング手法を採用した(図 1)。

多くの場合、1 枚の板木には 4 丁または 2 丁分が彫られている。十分な画像解像度を保つために、1 カットに 1 丁ずつを収めることとして撮影を開始した。つまり、4 丁が含まれる板木を撮影する場合、4 カット×5 パターン=20 コマとなり、分割撮影した場合には、板木表裏の全体像を記録したため、1 枚の板木を 22 コマで記録したことになる。板木の形式にはバラエティーがあり、単純計算はできないが、この方法で板木 5,800 枚のデジタル撮影を進め、約 90,000 コマのデジタル画像を集積した。

### 3. データベース構築と利用

デジタル化の次には、板木画像を自在に閲覧し、調査結果を蓄積していくためのプラットフォームが必要となった。これについては、板木 1 枚につき 1 レコード、1 丁につき 1 レコードとなる 2 つのデータベースを構築した上で両者を組み合わせ、web データベース「板木閲覧システム」(以下、板木データベース)(注 2)を構築し



図2 板木データベース 画像閲覧画面

た。板木データベースは 2010 年 2 月より、立命館 ARC のサーバで運用されている。

メタデータの詳細については割愛するが、板本書誌学に対応しつつ、板木独自の属性(板木の形式等)が記録できる構成としている。

板木データベース上では、あたかも板本を閲覧するかのごとく板木を閲覧できるよう、ページめくり機能を備え、板木 1 枚ずつの閲覧、または、板本のタイトルごとに丁順にそくした複数板木の閲覧を選択可能な仕様とした(図 2)。また、板木と板本とを比較照合したり、彫られている情報を読み取ったりする上では、板木画像を鏡像で閲覧するほうが便利であり、彫りの状態を観察する場合には正像による閲覧が適切であり、それらの閲覧方法を切り替え可能な設計としている。

さらに、5 パターンライティングによる撮影を行ったため、それぞれのパターン画像を切り替えて板木を観察できる機能を持たせ、必要に応じて板木の全体像を呼び出す機能も付加した。メタデータの編集権限があれば、オンラインで随時更新可能であり、リアルタイムに最新の調査状況が反映されるようにした。

板木のデジタル化・データベース構築には労力を要したが、結果、先にあげた難点を克服し、板木を研究資料として細部まで観察するための強力なツールが出来た。筆者はこのツールを駆使し、関連資料とともに考察を進めている。それらの結果については、本稿では詳述を避けるが、板木の基本構造を明らかにし、板木という視点から見た板本の新観察手法を見出し、「印刷の道具」という理解を凌駕する板木の機能を明らかにしつつ、出版研究を実践している。

第 2 章に述べた板木の性質により、板木は原物による整理が難しいが、板木データベースは板木原物の管理・調査ツールとしても有効であり、2013 年 6 月に新聞各紙の紙面を賑わした上田秋成著作「冠辞統紹」の板木(注 3)、同じく秋成著作で「煎茶の世界」展(九州国立博物館)(注 4)に出展されている『清風瑣言』の板木などは、共同研究の枠組みにおいて、板木データベースを用いた調査が進展する過程で見出された板木である。

板木デジタル画像およびデータベースは、公開を前提としている。板木は板本とは異なり、原則1組しか存在しないため、どの板本のどの部分の板木が現存するのかを情報共有することは重要である。

なお、詳述を避けた箇所を含め、第2～3章の内容は拙著『近世出版の板木研究』(注5)に詳述している。合わせて参照されたい。

#### 4. 関連データベースとの連携

前章に述べたように、板木データベースは日々調査結果が反映され、成長している。しかし、板木データベースと、すでにデジタル化されている他のコンテンツや構築済のデータベースが連携することにより、板木データベースや、データベースの利用環境は自ずと発展を遂げることになるだろう。

##### (1)板本

板木によって印刷されたものが板本であるから、当然ながら板木と板本は、コンテンツとして密接な関係を持つ。現存する板木は入木などの修訂技術による改訂版、または板木が再彫製された再版以降のものである場合が少なくない。板木と板本の諸本を比較照合し、版面の良し悪し、改訂の有無、初版と覆刻の関係など、版のバージョンを見極める場合、板木データベースとデジタル化された板本があれば、それらの照合は容易となる。

その実現のため、現在、板木データベースは、立命館 ARC の「ARC 書籍閲覧システム」(以下、古典籍データベース)(注6)とリンクしている。このデータベースでは、筆者が収集し立命館 ARC に登録した板本、立命館 ARC が画像の寄託公開を行っている奈良大学図書館および永井一彰氏所蔵板本など、板木に対応する板本を閲覧することができる。板木データベースで板木を閲覧し、その板木で摺られた板本を古典籍データベースでシームレスに検索・閲覧する機能は実装済であり(図3、図4)、画像単位の比較対照は実現できていないが、現状で板木データベースと古典籍データベースを相互に参照する環境は整っている。

##### (2)絵画・浮世絵

板木と、板木で摺られた絵画や浮世絵(冊子体裁をとらない一枚物形態の資料を含む)は、(1)の板本と同様、強い関係性を持つ。

筆者が現在までにデジタル化を行った絵画・浮世絵の板木は、近代以降の作品もしくは複製が大部分を占めており、連携によって近世出版研究に関わるメリットは即座には得にくい。板本と同様、連携は比較的容易である。今後、立命館 ARC で稼働している「ARC 浮世絵閲覧システム」(注7)が連携の対象となる。



図3 関連データベースへのリンクボタン(非公開モード)



図4 板木データベースと古典籍データベース

##### (3)出版記録

京・大坂・江戸にはそれぞれ本屋(板元)仲間で組織されて出版を取り仕切っており、日常の業務日誌や先例の記録として必要な情報が書き留められた。

また、それとは別に、個々の板元が残した記録も現存している。板元の本分は、むろん本を刊行することだったに違いないが、それを遂行するためにも、その活動のためには、板木の管理業務が必須であった。その結果として、出版記録上に板木の状態が記されたり、板木の管理に特化した蔵板記録や、板元間で行われた板木(著作権)売買の記録が生まれることになる。

これらの記録の中には、現存の板木に関わる記事が多く含まれている。それらを板木と突き合わせることで、板木がどのように運用されてきたのか、どのような経緯で伝存しているのか、といった板木の履歴を克明に追うことが可能となる。それはまた、板木が江戸期の出版において、どのような役割を果たしていたのかを明らかにすることにもつながるだろう。

上述の観点から、筆者は出版記録の画像・テキストデータ集積を鋭意進めており、板木データベースとの連携に向けて「出版記録データベース」の構築に取り組んでいるところである。

##### (4)板元

板木データベースに所収される板木の最終的な旧蔵板元は数軒でしかないが、現存する板木の伝存経緯に関わった板元、それらの相板元(共同出版者)を含めれば、現存板木の理解のために必要な板元は相

当な軒数にのぼる。また板木に限らず、板本・出版記録に目を移せば、出版を営みとした板元に関わる情報が必須となることは言うまでもない。

従来、板元に関わる研究ツールとして『近世書林板元総覧』(注8)があるが、板元に関わる総合的データベースの存在は聞かない。また同書は、研究の入り口で参照すべき資料であり、むしろ板木・板本などの諸資料を扱う上で、同書のブラッシュアップを行っていくのが利用者の責務であろう。

現状では、立命館 ARC 内で企図されている板元データベース(注9)との連携を摸索している。

#### (5)研究文献

本稿冒頭に述べたように、板本研究は広く深い蓄積があり、先行研究は豊富に存在している。先行研究参照の必要性は本研究に限ったことではなく、データベース上で閲覧した板木や板本に関連する研究文献の情報を引き出すことができれば、有益であることは言うまでもない。

現状、板木データベースは、立命館 ARC が運用する「ARC 日本文化研究文献検索システム」(注10)と連携しており、閲覧した板木あるいは対応する板本に関わる文献情報を引き出せるようになっている。ARC の文献データベースは、研究メンバーが持ちよった文献情報を集積したものであり、網羅性は低いものの、関連性の高い文献情報ばかりが集積されている点において、ノイズが極めて少なく、連携しやすい。しかし、研究文献のオープンアクセス化が進む今日、CiNii Articles(注11)の API を利用した文献情報表示から文献そのものを閲覧させる方向性も検討している。

#### 5. おわりに

板木データベース単体については、奈良大学所蔵板木を対象に構築が始まったが、2011 年度以降、調査対象を株式会社法蔵館、美術書出版株式会社芸艸堂、立命館 ARC、京都大学附属図書館、仏光寺などに拡大し、各機関の所蔵板木が板木データベースに収録され、収録板木枚数は 11,000 枚に増加している(注12)。いずれの機関も、遺産・資料としての管理運用に戸惑われている現状があり、板木データベースはこれらの所蔵機関をつなぎ情報交換を行うネットワークにもなり得る。事実、板木データベースの公開活動により、調査依頼・板木の寄贈・所蔵情報をいただくケースがでてきており、資料をめぐる人的ネットワークの形成にも寄与している。板木データベースは、板木研究ツールから、板木研究のハブへと成長しつつある。

データベース間の連携についてはまだ課題も多く、本格的な運用にはほど遠い。しかし、データベース構

築以前のデータを含めて、個々のデータベースが成長するにつれ、関連するデータベースは共鳴しあう。例えば板木データベースが成長すれば、古典籍データベースに資するところあり、その逆もまた然り、関連するデータベースが、リンクによってつながる連携の枠組みに加わることにより、自ずと研究の基盤が広がっていく。筆者が構築に携わってきた板木データベースについていえば、前章(1)～(5)のデータベースと連携することにより、近世出版総合データベースへと昇華する可能性が見えてきているのである。

付記 本研究は JSPS 科研費 25770097 による成果を含む。また本稿は、第 2 回知識・芸術・文化情報学研究会(2013 年 2 月 9 日、於:立命館大学大阪キャンパス)における口頭発表の内容の一部を含む。

#### 注

(注 1) コレクション構成には変遷があるが、奈良大学博物館編『板木さまざま 芭蕉・蕪村・秋成・一茶も勢ぞろい』(2013 年 6 月、奈良大学博物館)所収、永井一彰「はじめに」に示される内訳が最新である。

(注 2) 立命館 ARC「板木閲覧システム」  
(<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/db9/hangi/>)  
※2013 年 11 月 8 日閲覧。

(注 3) 2013 年 6 月 19 日付各紙報道。

(注 4) 九州国立博物館トピック展示「茶の湯を楽しむ IV 特別編 煎茶の世界」(2013 年 10 月 1 日～12 月 1 日、於:九州国立博物館)

(注 5) 金子貴昭『近世出版の板木研究』(2013 年 2 月、法蔵館)

(注 6) 立命館 ARC「ARC 書籍閲覧システム」  
(<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/db1/books/search.php>)  
※2013 年 11 月 8 日閲覧。

(注 7) 立命館 ARC「ARC 浮世絵閲覧システム」  
(<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/db/arcnishikie/>)  
※2013 年 11 月 8 日閲覧。

(注 8) 井上隆明『改訂増補 近世書林板元総覧』(日本書誌学大系 76、1998 年 2 月、青裳堂書店)

(注 9) 松葉涼子氏(日本学術振興会特別研究員、南山大学)作成のデータなどが基となる見込みである。

(注 10) 立命館 ARC「ARC 日本文化研究文献目録」  
(<http://www.arc.ritsumei.ac.jp/db10/bunken/search.htm>) ※2013 年 11 月 8 日閲覧。

(注 11) 国立情報学研究所「CiNii Articles」  
(<http://ci.nii.ac.jp/>) ※2013 年 11 月 8 日閲覧。

(注 12) いずれも進捗中のプロジェクトであり、現在は画像・メタデータとも非公開である。